

特別寄稿

テニアン島 遺骨収集中

泉信潤老師殉難

神奈川県 星 澤 實

— 内 容 目 次 —

- 一 泉信潤師の殉難を知らせるファックス
- 二 テニアンの佳子・マンガロニーヤさんとの交流
状況はか
- 三 嗣子 泉博道師夫人の手記
- 四 泉信潤師の足跡
- 五 信潤師夫人（泉郁子）は語る
- 六 泉老師の「特攻隊体験」

七 マリアナ諸島の遺骨収集の状況

付表 戦没者遺骨収集等地域別実施状況

【解 説】

一 泉信潤師の殉難を知らせるファックス

高山善光寺住職「泉信潤老師がマリアナのテニアン島遺骨収集で死す」と、テニアンが次ぎの如く知らせが、高山市天満町の御自宅・善光寺にあった。

A T T E N T I O N : M R ・ Y A M A G A T A

事故本人氏名：泉 信潤—IZUME SHINJUN—

生年月日：一九二八年十一月十六日 七〇歳

旅券番号：T E O 3 8 5 6 0 7

本邦現住所：岐阜県高山市天満町四—三

電 話：〇五七七—三二—三八〇四

渡航先の住所：P O B O X 68

S A N T O S E T I N I A N

電文：午前十一時頃、テニアン島カロリナス岬にある縦穴（深さ約30M）を降り、海岸線に沿って洞窟を探索中、行方不明となり、午後十二時頃、現地チャモロス人を通して警察へ通報、その後陸上からと海上から探索。午後五時頃、警察よりカロリナス沖の海中にて遺体発見。現在病院にて安置。

(T I N I A N H E A L T H C E N T E R)

その知らせを、岐阜県連事務局長 遠藤金次さんから電話で聞き、驚いたのは二月十二日でありました。想えば、平成十年八月五日、高山善光寺を訪問し、泉信潤師に「戦争体験の労苦を語り継ぐ集い」開催に対するご協力をお願い致し、快諾を得て、テニアン、サイパンの遺骨収集のお話を伺い、本堂に安置された、御遺骨、遺品等に焼香をさせて頂き、畏敬と感激の念を強くした次第であります。

泉師の遺骨収集の状況、テニアン、サイパン玉砕戦等については後に述べるとして、先に事故の状況、現地の方々との交流、報告につき記述し、さらに未亡人郁子夫人との対話、お気持等を書かせて頂きます。

二 テニアンの佳子・マンガロニーヤさんとの交流状況ほか

(テニアン在住 佳子・マンガロニーヤさんの、二月十三日付のファックス原文。二月七、八日、現地での信潤師との交流状況ほか)

泉 博道様、ご家族の皆様

この度は誠に残念な結果になってしまい、何ともお悔み申し上げてよいか分かりません。突然のことで私はまだ悪夢を見ているような気がします。お父さまの泉さんは、日本人で私が尊敬している方の一人で、誠実で律義でまじめで心の優しい方で、あんなに「いい人」は今まで会った事がありません。泉さんと知り合ってまだ三年にもならないほどのお付き合いです

が、この南洋の島で主人を亡くし四人の子供を抱えて「悪戦苦闘」をしている私に本当に親切にして頂きました。今では私の心にも「ほっかり」と穴があいてしまったような感じですよ。まして、御家族の皆様には、さぞお心落としの事と存じますが、あんなに素晴らしい「お父さま」がいたことをどうか誇りに思ってください。私のようなものには泉さんがお友達でいて下さったことに誇りを感じています。

今日、差し出がましいとは思いましたが、このようなファックスを差し上げたのは、皆様のご存知ないこのテニアン島で、お父さまがどのように行動し、またどのような状況であったか（事故の状況等は関係者の方々からお聞きになったと思いますが）お心残りでしょうかから私の知る限りで報告いたします。

二月七日に、こちらのテニアン高校の姉妹校が徳島から来島する予定で、毎年姉妹校来島の際は、学生たちに慰霊祭をするために徳島の慰霊団々長で徳島県鳴門市大麻比古神社の森茂丸氏一行も随行することに

なっております。

森氏とお父様は、私を通じてお友達になり、宗教の境界なしの目的意図を同じくして、いいお友達としてテニアンで合流し、お互いに日程を調整しながら遺骨収集を共にしておられました。今回、こちらへ来られる際も、お二人で電話連絡等で日程を繰り合せてこちらで合流されることになっていたようです。

こちらへ来られる一週間ほど前にお父さまから電話を頂き、二月七日に来島される旨をお聞きしました。私はまた泉さんにお会いできるのを楽しみにしておりました。

さて、お父さまは以前より、こちらの学校や教育関係に貢献してらしてテニアンへ来られる度に学校の方へいろいろとお心使いをして下さり、モニターギョウ長もバト教頭も泉さんの事はよく存じておりました。ですから、泉さんが来島されると聞いて七日夜に行われる姉妹校との「歓迎パーティ」に、泉さんも森氏一行も招待されました。私は、七日の午後四時半頃、名鉄フレミング・ホテルの庭先で泉さんにお会いしまし

た。お元気そうで、何時ものようにテキパキと手際よく動かれる方で、連れていた私の子供達（娘八歳、息子五歳）にチョコレートのお土産を頂き、その夜のパーティでお会いする事を告げて帰宅しました。

夕方七時頃、私は再びホテルの方へ伺い、泉さんに、必ずパーティに参加して下さいるように確認に行きました。でも泉さんは島袋三郎さんと翌日の打ち合わせか何かでお出かけになった後でした。バト教頭宅でパーティが始まって三十分ほどで泉さんがいらして、校長や教頭と挨拶したり、生徒たちと雑談したりで（いつもはもの静かな方で）、いつになく陽気で嬉しそうに（生徒の間を回って、ご自分で再調理された練りがらしを配ったり）して生き生きしていたのが印象的でした。これは私だけでなく、森氏やバト教頭も同じように感じていたようです。

パーティの間、泉さんと森さんは翌日の「遺骨収集」の時間の打ち合わせをしていました。泉さんは「朝八時から森さんたちとカロリナスの洞窟へ入る」といい、森さんは「先生、お疲れでしょうから、そん

なに朝から行かなくてもいいでしょう」。泉さん「そうですね。では中村さんのボートをチャーターしておきますから、海側からカロリナス（自殺岬の岸壁の亀裂の中に遺骨が六十体ある事を、お二人は米軍演習中に発見されている情報を既に入手していたらしい）に入るのは午後一時頃にしましょう。（自分のグループの人々に）誰か若い者で泉先生と朝行きたい人はいるか？」。

私はお二人の間について、こんな会話を聞いておりました。そして、いつも泉さんは二三日滞在されるのを知っておりましたが、何となく「泉さんには、お土産のジャムを今日中に渡しておこう」と感じ、パーティの後、子供達を連れて泉さんのお部屋へお邪魔して（時間も遅かったので）一言二言会話をしたただけで失礼しました。確か「泉さん、マンゴのジャムは結構美味しいでしょう」「ええ、ええ、美味しいです」が最後の会話となりました。

翌日は泉さんにはお会いしていませんが、昼休みに

森氏と名鉄のスタッフが顔色を変えて車を飛ばすのに
出会って、泉さんが行方不明と聞きました。私は学校
にいても何も手につかず、何度も名鉄フレミングに連
絡をとって状況を聞こうとしましたが、何の朗報もな
しでした。家に帰ってフレミングからの情報を今か今
かと待ち、五時頃スタッフからの電話で「泉さんが病
院へ運ばれた」と聞き飛んで行きました。生きてい
ると思っただけです。病院にはもう地元の警察や沿岸警察
や森氏一行等、大勢の人々がいました。警官の一人が
(英語の分かる) 私に「沿岸警察官のレイ・アルダン
がボートで捜索中、一〇〇メートルほど先に泉さんを見
つけたが、大きなタイガー・シャークが(再び?)
アタックしようとしていたので、全速力で(サメの間
に入るようにして)泉さんを引き上げた。ブルーの服
なので分かりにくかった」と説明するのです。私は気
が動転していたので、それでも泉さんは生きていますと
思っていたのです。

八日の朝、泉さんは予定通り三郎さんや地元の青年

二人、森氏のグループの野口さん等でカロリナス(自
殺岬の近くの岬)へ行き、十一時頃「そろそろ帰りま
しょうか。午後からボートで海側から行く事ですし」
と話していたらしいのですが、一時までまだ時間があ
るとみたのか、この岬の縦穴にきた時に、泉さんが野
口さんに「ここに入りますか。入りましょう」とい
い、野口さんたちが腰にロープを巻きつける準備をし
ている間に、行動がてきはきと素早い泉さんはさっさ
と先に下りたそうです(泉さんはニコニコしながら
入っていったそうです)。

三郎さんが上から覗くと「泉さんは下についてから
右に動いた」といいます。恐らく泉さんは下に降り
て、どこかに洞窟か崖壁に亀裂がないか調べようとし
て動いたのだと思います。

森氏は「この時の泉さんの気持ちがよく分かる」と
言っていました。彼でも、下に降りると回りに洞窟等
を必ず探すらしいのです。野口さんが次に降りたとき
には両サイドに洞窟も亀裂もなく、ただ水による岩の
浸食だけで、人間が入るような穴もなかったと言いま

す。泉さんが降りて右に動かれた後どうなったかは誰にも分かりません。

数年前に義弟が友人とボートで釣りに行ったまま行方不明になり、地元の沿岸警察もコースト・ガードも見付ける事ができず、日は刻々と過ぎました。私たちは「あー、神様、無事帰ってきますように」と願い、二日目「あー、せめて身体がありますように」と願い、三日目「あー、せめて遺品でも身体の一部でも見付かりますように」と願っていました。幸いにも三日目（捜索が打ち切られる寸前）鳥からずっと離れた沖で、米空軍の飛行機がエンジントラブルで漂っている義弟たちのボートを見付けました。

不幸の中の幸いにも泉さんはお身体が発見され（私の主人の場合は、一週間の捜索にも拘わらず身体が見付からず、死亡証明書も生命保険もなしで）、私は、もう病院でもお会いしませんでした。息子さんやお家族の方々に確認されてよかったですかも知れません。何度考えても、残念でたまりません。主人を島の北方で、泉さんを南方で。

二月十二日は、一日中「泉さんの無念の涙の雨」が降っていました。今は乾季で、あのような雨は本当に珍しいのです。あの日はサイパンでの最後の自分かれに参加できず、失礼しました。日本に落ち着かれたら、またお父様を彼の好きだったこの島へ連れて来て下さい。お父さまのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

佳子・マングローニヤ

2013.11.19.9

三 嗣子 泉博道師夫人の手記

泉信潤師御急逝の報に接し、嗣子博道師（東京青山、梅窓院住）夫妻、及び妹さんは、直ちにサイパンに向け出発されました。二月十日夜中三時着以来、現地の官、民、同志の方々の協力により、家族三人は疲労困憊の中、信潤老師の御遺体と共に帰京、文字通り、日本の土となぎった努力と、ご協力者に対する感謝の念を示され、また、御遺体の帰還を待たれる母君、郁子夫人に対する感謝を含め、父君信潤老師への

思慕の念を表された報告文であります。

父 泉信潤は、平成十一年二月八日 テニアンにて亡くなりました。

父のファックスで宿泊予約のやり取りがあつたをみて、日本を出る前にキャンセルしておかねば申し訳ないと思い、連絡の電話をしました。

この一本の電話が、第一の幸運でした。

「泉ですがキャンセルの連絡です。実は……」と一報を入れておいただけだったので（サイパン・グランド・ホテルのサブ・マネージャー吉田さんという方ですが、この方は父が行く度にお世話になっている方で、父とファックスで、宿泊などの遣り取りなどもしていたので、急な事で絶句しておられました）。

「何かお力になれることがあれば、どうぞおっしゃって下さい」「有難うございます。父がそちらへ行く度に御厄介になっていたようで、こちらこそ有難うございました」と。それから、サイパン・テニアン

への旅が始まりました。たった一本の電話が私たちを助けてくれたようでした。

その吉田さんが、私たちのために二月十日夜中の三時過ぎというのに、サイパンに着いた私たちを迎えて下さいました。有難かった。他にサイパン領事館の山形さん、テニアン・フレミング・ホテルの永井さん、旅行会社の方なども出迎えてくれていて感激したのと同時に、父の死が信じられなかったのに、現実味を帯びて来て落ち込みそうな気分になられました。

事態が事柄なもので、自分たちのスケジュールを考へもせず、サイパンで二時間半は待ち時間となるので、どこかで仮眠をとらないと体が持たないということに誰も気付かず、いざとなれば空港でも横になるか、という気持ちでしたが、サイパンの空港で、吉田さんは、仮眠のために部屋が容易してあることを言うて下さり、車でホテルまで乗せて下さいました。遠慮しましたが、ご厚意に甘えさせて頂きました。人の親切が心から嬉しく感じられました。本当は三人ともクタクタでしたから、心底助かりました。

夜明けにホテルのロビー前で、吉田さんが車を容易して待っていて下さり、空港まで送って頂き、ご親切にして頂いたことにお礼をして、テニアンに向かうことができませんでした。

テニアンの空港では、フレミング・ホテルの支配人の永井さんが待っていて下さいました。父は三日間宿泊する予定だったのに、突然の事故により亡くなったので、永井さんにも、お世話やご心配をお掛けしたことを思うところ、結局、この永井さんの車で運転して下さい、本当にお世話になりました。

現地では、事故当時、一緒にいた島袋さん（テニアンに暮している沖繩出身の日本人）も来て下さり、様子を教えて下さいました。島袋さんは、現地でガイドをしていた関係で、父と一緒に遺骨収容するまでに親しくなっていたようです。一度、二人は死にそうな目に会うぐらいの苦しい思いをして遺骨収容から帰って来たとき、父の記録に残っていました。

警察では、事故か事件かで、大きく扱いが違いました。事件だとすれば時間が掛るようでした。領事館の方に説明して早く遺体を受け取るようお願いして、病院に安置されている遺体と対面しました。

覚悟がいる。言葉が見付からない。

博道さんと、回向をする。声になっていなかった。

寿枝ちゃんの気持ちは、いかばかりか。

テニアンのフレミング・ホテルで、父の荷物を整理していて、大きなバッグ（リュック）は汚いし荷物になるので置いて行こうかと思いましたが、背中に当たる部分に、何年に沖繩、何年にサイパン、何年にテニアンとびしりと自分の覚えとして書き込まれてあるのを見付け、今回の分だけ帰ってから書くつもりだったのでしょうか、書いてなかったのを見て泣けてきました。このバッグは持って帰ってやらなければと思い、そのバッグに幾つかの父の遺品を入れ、フレミング・ホテルを後にしました。

フレミング・ホテルのレストランにいたとき、森さ

ん（徳島県の神社の宮司さん）とお会いし、父のとこ
とを話して下さいました。父と同じような思いで慰霊
に来ていらっしやって、団体ツアーでいらっしやるよ
うでしたが、父は今回、この森さんが団体できている
ツアーの日程に誘われましたが、団体のツアーでは白
由に出来なくなるし、父は十四、十五回も来ているの
で旅行馴れしているし、父の目的はほとんど遺骨収集
でしたから、個人的な旅行の方がよかったですよ
う。それにサイパン、テニアン両方とも宿泊先は馴染
みの宿だったし、慰霊法要には参加するという形の森
さんと一緒にするようでした。

亡くなる前日の二月七日、森さん達と合流し、慰霊
法要を行い、その後、テニアン高校の生徒やマンダ
ローニャ・佳子さん（徳島出身のテニアン高校の先
生、現地の方と結婚し三人のお子さんの母）などと、
パーティーの席で父ご自慢のお手製の辛いナンパンを
ご馳走し、話などをしていた時に遺骨収容をする話
しが出て「二月八日の一時から一緒に遺骨収集をしま
しょう」。

テニアン警察が、手続きに時間を費やし、日本領事
館、島袋さんまで巻き込んで、お付き合い頂いて、何
とか夕方の便でサイパンに着きました。島袋さんは、
父の乗ったセスナを敬礼して見送って下さり、見えな
くなるまで帽子を振って下さったのに胸が熱く喉にこ
み上がって来るものがありました。島袋さんはテニア
ンから見送る前に「日本に帰してあげて下さい」と
言っていました。

「お父さんは、日本兵を何体も収容し、日本の土に
返して来た方です。そのお父さんを連れて帰ってあげ
て下さい。自分が帰れなくなってしまうなんて……」
と、男泣きされました。「はい、何とか日本に父を連
れて帰りたいと思います」と主人が受けて、言葉に出
していました。迷っていたことが口に出したことで、
そのように動き出したようでした、本当に。

サイパンなら大きな病院もあるし、預かって頂き
……どうするか。もし「ここから日本に遺体を運べる
としたら手続きはどうなるのか」と考えながら……。

サイパンに私たちそして父の遺体が着くと、空港でグラランド・ホテルの吉田さんが車で迎えに来ていました。またしてもご厄介になり、有難く、そのままホテルに宿泊しました。領事館の山形さんと別れ、では明日は日本に遺体を連れて帰るのだということで、いろいろ回らないと言われましたが、食べて寝ないと駄目だと、体の方が悲鳴を出してしまいました。「限界だね、もう早く寝よう」と話し合っても、皆寝付けることができなかったようでした。

十一日は領事館で手続き、葬儀社で手続き、病院で手続き、旅行会社で続きと、いろいろ決め事をする。お昼にホテル近くで食事しようということになり、「百番」というお店を見付けました。以前主人も父と来たお店で、日本人の方がやっているお店でした。「懐かしいな」と言いながら入りました。注文をして待つ間に壁に写真を見付け、いろいろな人が写っている中で、父の写っている写真を見付けました。遺骨収容仲間と、このお店にて写した時のものです。三人

とも心の中で「欲しいなあー」と思っていました。主人が、店主に訳を話したら驚かれました。「また何時何時来るからと言って、うちによく来てくれていたよ。遺骨収容しにサイパンに来る度に寄ってくれたのに信じられないなあー」と、店主は、その写真を持っていきなさいと、下さいました。

森さんには、そこでお食事をご馳走になり、また差し入れの飲み物まで頂きました。熱いところなので助かりました。私たちの顔色を見て、気をお遣い下さって有難く感じました。うつろに見えたのだと思います。

最初、日本を出て来る時、私たちはテニアンにて土葬してくるしかないか、という気持ちでおりました。遺体を持って帰れるなんて思ってもいませんでした。フレミング・ホテルの永井さん、島袋さん、マングローニャさん、森さん、皆父と親しくお付き合い下さっていて、現地にとんだ私たちを助けて下さいまし

た。現地の警察が「自分の所有している墓地でよかったら提供してあげるよ」と言って下さり「そのご厚意に預からう、父もこの地には思いが沢山あったから」と言う話しも出て「じゃあ、お願いしよう」と決め掛っていたのですが、テニアンはキリスト教の教えが広まっていて、クリスチャンばかりだということが判り、僧侶である父を埋葬するとは言えなくて、考える時間が必要でした。

ですが、この時三人は、睡眠不足と疲労と精神状態が著しく不安定で、おまけにテニアンの暑さのため、頭で判断することがひどく苦しいものでした。どうしても良いのか。ゆっくりと考える時間がある訳もなく、どうしたら良いのか、無い知恵を出し合っていました。日本領事館の方にお世話になっているし、遺族である私たちがどうしたいのか決めなければことは進まず。「何とかならないものか」と話しをしていた時に、マングローニヤさんが「以前、人が亡くなった時に焼骨した」と教えてくれていたのを覚えていて、「もし出来るのなら…」と思いましたが、設備を見に

行ったら、とても状態が悪く、一時は「やれ、良かった」と思ったのが、再び「どうしよう」に変わりました。

「サイバンはテニアンより大きく人口も多く、共同墓地があるそうです」と聞き、「ここにも…仕方がないし、共同墓地ならどうだろうか」。とにかくサイバンへ向かいました。一日中、フレミング・ホテルの永井さんが車を出して下さって、しかも運転して頂いたお陰で助かりました。人の親切を、この際有難く受け取らせて頂きました。後で聞いたらタクシーはいそいです。

グランド・ホテルから電話をしました。相手は父と同郷で、同じ教員の中村さんの所です。サイバンに住んでいらっしやいます。数年前に父や主人と一緒に中村さんも遺骨収容に行かれたことがありました関係で、サイバンに来ているし「父のことをお知らせしないで日本に帰るといふことも出来ないしね」ということで、恐る恐る電話をして見ました。内容を聞き、やはり驚いた様子で、奥様が「信じられない…」、当の

中村さんは現在体をこわされ、弱られましたでしたが「私の方が早く逝くと思っていたのに：」とがっかりされていました。ですが、「日本に帰る前の十二日、お別れ会をしたので、病院に是非いらして下さい」とお伝えしましたら、ご家族で来て下さいました。

二月十二日、病院の教会設備のある小さなホールで、セレモニーをさせて頂き、縁の方達と最後のお別れをし、空港へと向かいました。しとしと雨が降る中、父を乗せたリムジンが厳かに病院を離れ、私たちもその後を追い空港へ向かいました。信号機の付いた交差点に近付く度、警官が立っていて、父の車を一度も止めませんでした。どの警官も父の乗ったリムジンに対して最敬礼をして下さいました。

そして空港では、中村さんの娘婿の方が現地の方で、コンチネンタル航空にお勤めになっていたので（この方も父や中村さんと共に遺骨収容に協力されていました）、父が亡くなったのを残念がって「日本まで何とかしてあげますよ。もちろんご遺体も一緒にね」とおっしゃって本当に飛行機に乗せていただくこ

とができました。なんとという幸運。中村さんに電話して連絡してなかったら、こうはならない、と：もう私たちの力ではない、何かに突き動かされていて奇跡が奇跡を呼ぶように、何だか良い方向へ話しが行っているの、もう全てお任せするようにしました。そして、父の遺体が飛行機の貨物室に収まるのを見届けて、一緒に帰られる有難さを噛み締めました。こんなに次々と救いの手が出るのは、父の生前の行いによるものか、それともやはり父も日本に帰りたかったのか。

日本に戻ってから茶毘にすることにしたのは、梅窓院の出入りの葬儀社への電話でした。私たちの要望に沿って手続きをしてくれたので安心しました。日本に戻り、三人とも疲れ切っていました、一息つけた感じでした。

これがサイパン、テニアンでのことでした。夢のような長い間だったような、私たちにとっては、人生のとても深い重い出来事でした。

高山では無事に葬儀をしました。盛大に、英霊を亡

くしたかのような大きなものでした。

四 泉信潤師の足跡

〔真蓮社實普上人欣阿誠道信潤大和尚〕

昭和三年、泉家長男として高山市天満町・善光寺にて誕生。

昭和十八年、中学三年、十四歳にて甲種子科練十三期（前期）に志願、松山航空隊に配属、最後は九〇一空にて一式陸上攻撃機搭乗員（陸攻隊偵察員）として北朝鮮元山派遣隊に在隊中、終戦を迎える。しかし陸攻隊搭乗員全員一致で米軍B29発進基地サイパン・テナアンへ特攻すべく決意。八月十七日、発進準備中「小松基地で他の部隊と合同して特攻を敢行する。ただちに小松へ向かえ」との司令官の（温情ある偽りの命令）に従い、深夜小松基地に着陸、即刻武装解除され、結果として九死に一生を得て生還。

多くの同期の友を沖繩特攻で失い、寺の長男である身、若人の育成と慰霊こそ自らの務めと、僧侶としてまた高校教員として三十二年間勤務し、退職と同時に

沖繩慰霊の旅を始める。平成三年、岐阜県仏教会副会長の折、サイパン島に慰霊堂を建立、その開眼式に参列の折、霊魂に呼び寄せられたのか、一人でジャングルへ踏み込み、遺体の一部を発見。以後毎年、サイパン・テナアンの両島、慰霊遺骨収容の旅を年二回ずつ合計十七回自費にて実施。毎回ジャングルや洞窟の内部に踏み込んで多くの御遺骨、遺品を回収し、現地にて慰霊法要を実施。平成十一年二月八日、十八回目の遺骨収容の旅の途中、テナアン島の海岸沿いに発見された深さ三〇メートルの堅穴洞窟内にて遺骨探索中、洞窟内に流れ込んできた海水にさらわれ逝去。群青の海より回収された遺体は、日本に搬送後茶毘に付す。享年七十歳。

三月二十八日、泉信潤師の七七忌法要は、高山市の善光寺で盛大に営まれ、各界の有力者、戦友、軍短協・恩欠連幹部も出席され、アソシア高山ホテル・リゾートにて師を慕う会が開催され、師の行跡を偲び、未だ取められざる戦没者御遺骨の収集につき話は及び

ました。

戦後既に五十余年、新たなる世紀を迎えんとする今日、国民がなすべき大きな責務が忘れておられるという発言もありました。泉師が私費を投じ、しかも老師は命を投じてまでなした、この事業継承につき、参会者は肝に命じておられました。私も団体を代表し、心境を述べ、老師の足跡の件に触れた時、涙がにじみ出て絶句した次第でありました。

本年七月の法要も、多くの人々を集め盛大に挙行され、師を偲ばれたと知らされました。私は、当日所用のため欠席いたしましたので、二月二十七日、恩欠連同志とともに善光寺に参上、香を手向けた後、未亡人郁子夫人のお話を次のごとく伺いました。特攻隊員として生を永らえ、多数の戦没戦友を五十余年の今日まで思い続けられ、また特攻出撃の最後に別れに來られた舎弟を帰路、高山線事故で失う。さらに同郷の人々が多く玉碎されたサイパン・テニアン島の遺骨収集に命を落とされた夫君、信潤師を思い、高山善光寺住職を継承される嗣子博道氏等に対する思い、等々を時に

涙しながら語られたのであります。

私事であるが、私の次弟はテニアンで降伏に応ぜず洞窟で病のまま戦没し、同僚が帰国の折、洞窟中での屍体より歯を骨の代わりに持参し、戦後、母や兄妹のもとに届けてくれたという幸せものであります。彼の性格から言っても、降伏し捕虜となることはできなかったであろうし、もし捕虜のまま帰国していたら生涯涯苦しんでいたであろうと思います。

そのような思いをしながら、戦後五十余年、白骨化した戦没者を、そのままに放置出来ず、困難を克服しつつ、十数回遺骨収集され、遂に殉難死された信潤師を想えば、涙なしで語ることは出来ないものである。それは三十年経つとも、五十年でも八十年でも、生きる限り、心に刻まれた痛恨事である。

次に、郁子未亡人との対話を記載する。

五 信潤師夫人（泉郁子）は語る

平成十二年二月二十七日、

高山善光寺において

主人は高山善光寺の長男として生まれました。予科練に入りまして、その後特攻隊になりましたが、そこで命を頂いて、本当は向こうへ行かなければならないのに帰って来ました。そうしますと、死んだ方たちに対する気持ちがあったと思います。ですから、ズーッと高校の教員をしながら、私も小学校の教員をしまして、結婚し、その後教員をしながら、戦時中のことを二人でよく話し合っていました。

その後、高校を辞めましてから寺の住職として善光寺という、長野善光寺飛騨別院でございます。そのお寺も二人で維持しながら、やっぱり自分が特攻隊で見送った方達に、自分が生き残った、そうだけれども皆さんには行かれてしまった、その申し訳なさが今日あったと思います。

それから、毎年行くんだと言って（涙声）私はこれを本当に良いことと思っておりましたし、私も一回ぐらい、付いて行きましたけれど、私はそのようなことを出来る場所、状態ではなかったのです（寺の留守を守る）。

その後私は婦人会の方々と一緒に現地へ行きました。そういう、やっぱり自分の命を掛けてやっている姿を見ますと、私はやっぱり、それはどうしてもやって欲しいと思っただけです。

本人は御遺骨を、どうしても日本へ連れて帰りたいというのです。向こうの土地で亡くなったままで、向こうの土になるということは、本人はとても辛かったです。自分が日本に帰って来るのなら、自分の大事な同僚達は皆向こうで亡くなっている。それが辛かったですから、暇とか時間があれば連れて来たいと、それが本人の気持ちでありました。

私もそれは良く分かりました。自分も戦時中雑炊を食べながら、育てて来ましたし、兵隊さんたちを送るということもやって来ました。千人針や慰問袋なども作って来ましたので、やっぱりそういう中で一番大事なことをやっているのだなあ、この人はお寺の住職であると同時に、特攻隊、予科練で、自分の気持ちを買って来た人なんだから、両方の面があると思っています。私も一緒に、その気持ちを大事にしようと思っています。

おりました。

毎年毎年行かれますが危険なところなのです。そして大変なことなのです。私も出来るだけ協力すると言っても、やっぱり毎年行つてらっしゃる間は本当に眠れない。どこかへ旅をしているという気持ちになれません。あんなところへ行つてどうなるんだらうということだけが心配で、でも本人は行かないと自分の気持ちが届かないのですから、行つてみると満足して沢山の方の御遺骨をリュックに入れて背負つて帰つて来られる訳です。そして、行く時は「行つて来る」と言つて行き、帰ると「持つて来た」と言つて本堂のところに飾つて、遺品も全部並べて、自分の戦友も友達も皆連絡してあり、その方達も見えて、一緒にお経をあげて、お守しながら、皆様とお茶を飲みながら、今度はこういうところを、こういうふうに行つて持つて来たんだよ。

しかも、空港ではなかなか簡単に通してくれないので、中身を調べられると大変なことになるから、でこいう話をしているか悪いか分かりませんが、ケサを

掛けたり荷物をいかにも私には関心を示してくれるなと、時には、そんな話をしてくれました。

とにかく、何とかして自分の寺まで運んで来るんだと、他のことは先のことだという気持ちでやってきたのだと言ふのです。本堂にお骨を飾りまして、お勤めをした後、その話をして、その後、自分で市役所へお願いをして、それを焼いて貰ひまして、ここに飾つてある訳です。それが毎年毎年ですから、それが今年で十四年目だったので。

今年は自分で焼けませんでしたので、ここにいらつしゃる小林さんや遠藤さんがお世話して下さいて焼くことが出来、ご遺骨にしてお経をあげて下さったのです。そういうお姿を見ておつて、うちの住職は幸せだったなあと、沢山の人に守られながら、一人であるなことは出来ぬと思ひました。

皆様の気持ちを汲みながら、自分が元氣だったから、そういう仲の良い方と、毎年毎年行つて来た。そういうところが幸せな人と私は今思うのです。ですから高校で生徒と話をし、授業をしている時も幸せで

しょうが、そういう仲間と行って、大変な仕事でしょうが、皆で一緒にやって来た気持ちには本人しか判らないと思います。ああ良かったなあ、うちの本堂だと「今年の正月もここで迎えられる」と喜んでいました。

そして私は一生懸命飾って来たのですけれども、何か今度は七十歳になったものですが、七十になった人が、金梯子で降りるといふことは大変なことで、洞窟に入るとは、それをまあ若い人に一緒に手伝って貰うとか、今年もまた行かねばならぬのかなあと、実は私一人ここだけの話ですが……。

森さんや徳島の人たちと向こうへ行ってお経をあげることにして、遺骨を探したり、取りに行くことは若い人にしてもらって、テナアンでお経をあげるのは任職として当然だと思いました。

だけど、洞窟に入るのは何か、誰かにやって頂いて、お経をあげるのは自分です思ったのですが、住職はああいう性格ですから……。

テナアン、向こうへ行って案内人がいるんですが、自分が良く知っているからと先へ行って、洞窟の中へ

入って事故になったのです。私はそれが宿命というか、本人はそれだから、長男は「お父さんは壽命か運命だったのだよ」と言いましたので、私は「お父さんは壽命だ」と、子供達がそう思ってくれたのが、あの子たちが一番辛かったのだらうと思っていましたので、向こうへ迎えに行くのも、私は寺ですので、皆様が弔問に来られますので、此処にいなければならぬ。

そのため、長男と長男の嫁と、妹と三人で迎えに行ってくれて、向こうで枕経をあげたり、病院へ行つて手続的なことは全部やってくれました。その時、テナアンの人や警察の人が、とても丁寧に扱ってくれて「僕の土地があるから此処で埋葬したら、土葬にしたら」と言われたそうです。

でも、長男たちは母も未だ会っていないんだし、それから檀家の人、皆様とか、戦友の人たちにも申し訳ないので、此処で土葬に出来ぬということで、丁寧に断りして、遺体はテナアンから運びました。

そこで、運んでも、やっぱり日本へ連れて帰りたい

と、「父は遺骨をあれだけ日本に帰したのだから、僕が連れて帰らねばどうするよ」と言っ、あちこち頼んで、そうしたらちようどサイパンから日本へ行く貨物便が一つ空いていると、見付けて下さいました。

それは、中村さんという高校の先生で、テニアンで非常に仲良くしてくれた方なのです。その先生の息子さんが飛行機会社に勤めておられ、その貨物便を一つ見付けて下さった。そこへ入れて貰って、日本へ来て、長男が東京の梅窓院というお寺に勤めております関係で青山で火葬に付することが出来たのです。長男は「お母さんに申し訳ないが、お母さんには来てもらいたいのだが、お母さんはお寺があつて来られないのなら、僕達でいいのかな、いいのかな」と言つて火葬にしました。その時は「貴方たちに任せるし、お母さんは貴方たちがやってくればこの上ない。貴方たちも嫁二人ともやってくれることは、お母さんも一緒だよ」と言つて、そこで頼みました。

皆さんが、本当に日本の土になれたんだ、青山で火葬にしたという事は、外国で火葬にしたんではない

のだから、日本の土になれたということは、私も本当に嬉しかった。日本の土になつてくれれば、ここまで、あの暑い国から遺体を連れて来ることは、所詮無理だと判つておりますから、東京で火葬にして遺骨にして後、連れて来てくれたのですけれど、私は住職というが、主人は仏教的にも自分としては非常に志を遂げた人だし、それから先輩の人とか、同僚の人たちと一緒になつて、そして何人かの方を連れて来られた。本当に何とか自分の本懐を遂げたというか、ある面で幸せな方だと思ひますが、反面では非常に子供達も余り急なことでびっくりしました。

長男は、未だ梅窓院というお寺に入つて修業しているので、善光寺としては、今大変なところなのです。途中で住職が亡くなるということは、長男が今住職を引き継いでおりますが、東京の梅窓院の勤めと両方で、個人としてはまあ大変なところですよ。

高山の善光寺の住職の勤めと両方の板挟みで本当に大変な苦勞をしているのを私は見て、何でこの子に二

重の負担を掛けねばならぬかと、時には苦しいこともありすけれど、やっぱり長男も「お父さんは寿命だった」と、私に話をしてくれるところを見ると、あの子もお坊さんやなと思います。私もそう思わにやいかんと思うようにしています。ここで一生懸命やって、その間に教えるとか。

いろんな方がお参りに見えました。私と一緒に話をしていると「僕はローソクを立てた」とか「住職は線香を立てはった」とか、いろんな話をしてくれますので、「そこに仏様を飾った」とかそういうことを聞きますと、やっぱり住職と同志の方が沢山いらっしゃって、一緒に歩いたということ幸せを一杯持っているのだと言うことを、「友達が沢山いて、住職一人ではなかったなと、今、向こうの方の彼方へ行かれても、きつとそういう人たちに会えたのだろうと、向こうでそういう話を沢山出来ておるんだなあ」と、一人で淋しくしておるのじゃないだろうなあと思ひまして、そういうところで何か慰められております。

私自身も子供達が、余り急なことだったのですか

ら、今後のことも、もっと大変なのです。お寺で住職が急に亡くなってしまふことは、私自身も子供達を支えられるところは一所懸命支えながら、そして子供達も頑張っておりますので、周りの方にも応援してもらい、一所懸命やっていかなきゃならんなあと思ひますし、そういう住職とか、戦争のことでそういうことを解決せなならんと、そういう主人を持つということとは、私も誇りに思っていることもあります。(と、嗚咽、落涙された)

〔星 澤〕

私が、老師にお会い出来たのは、平成九年の平和祈念展開催の折でした。その準備のため、看板とか何かを持って、ご協力されている方がいらっしやいました。しかも、作業衣を着ておられましたので、その時、泉老師を知らなかったのです。後で老師と知り、陰で、人の嫌がる仕事をして頂いている。本当に有難いと思ひ、それから善光寺さんに寄せて頂き、テニアン・サイパンで収集して頂いたご遺骨や、鉄帽、認識

票、一升壇に入ったテニアンの水などを拜ませて頂きました。

私は、九年の手帳を見ており、十月六日、祈念展打ち上げの役員会の折、特攻隊の同志、小峠市会議員のお話を聞きながら、泉老師のお出をお待ちしていたのですが、サイパンへ遺骨収集出発準備のため欠席という事で、本当にご多忙の中ご苦勞の事と感謝をいたしておりました。このことは、元議員であり仏教団体の幹部である、恩欠団体高山会長の小林仁平さんから伺っておりました。

私の弟が実はテニアンで玉碎というか、病気で倒れていたようですが、同僚たちは降伏されたが、本人は降伏しないと洞窟に残り、戦後同僚たちが日本へ帰国する時、洞窟の中の弟の遺体（恐らく白骨化していたか）から歯を遺骨代わりに、母や兄妹のいる自宅へ届けてくれたということ、私が戦地から帰還した昭和二十一年六月に知りました。

また、平成十年九月十三日、高山で開催した「戦争の苦勞を語り継ぐ集い」の折、テニアンのご遺骨・遺

品を会場にお持ちになり、体験談としてご自分の特攻のお話をなされ、多くの参会者は涙を流して聞かれておりました。また、幻冬社出版の小林よしのりさんの「戦争論」についても触れ、日本の将来と青少年について話をされ、感銘を与えておられました。

その前日、老師がテニアンから戦没者のご遺骨をリックサック一杯、三十何キロヲ背負って十四時半頃帰宅された直後にお会いしました。その折、あと三〇メートル行けば遺骨がある。しかし、疲勞困憊し、そこまで行けなかった、と残念がり、今度は、お持ちして日本へお帰してあげたいと、と話されていました。

その思いを実行されようと、この度のテニアン行きであったのではないでしょう。また、「語り継ぐ集い」の会のお話の中で、熊谷飛行学校の藤井中尉が、特攻に行かれることを決していたが、夫人は中尉の決意を実行させるため、後顧の憂いを無くするため、荒川に親子で入水自殺をされた話もされました。

実は、その藤井中尉の下で飛行学校で教育に従事していたのは、私の妹の夫であり、藤井家とは居を隣に

し、その間の事情を良く知っていたというのであります。藤井中尉はその後、特攻で名譽の戦死を遂げ、亡き夫人や子供さんのところへ行かれた訳であります。そのような諸々の関係から、無縁であった老師に対し敬愛の念を深くしておりました。

私は、泉老師の行動と精神を後世まで残してゆきたいと思えます。未だ帰らざるご遺骨が百万以上残っていることを思えば、涙なくしては語れない、と。郁子夫人共々泉老師の志を継ぎたいと、語り合いました。

六 泉老師の「特攻隊体験」

泉老師が、「戦争体験の労苦を語り継ぐ集い」で講演された「遺骨収集報告は」は「平和の礎」第十巻に掲載されておりますのでお読み頂ければ幸いです。

その中に、

☆ 戦争経験足掛け三年、予科練出身の特攻隊の生き残りでございます。十四歳、十五歳、十六歳と、最後は北朝鮮の元山におりましたが、上官の配慮も

あったのでしよう、私は寺の長男ということで生き残った一人でございます。

☆ 八月十六日、元山の第九〇一航空隊の旭部隊の一式陸攻に搭乗でしたが、その搭乗員は四十六名おりました。終戦になり、その搭乗員ばかり集まり「どうしよう。生きて帰れない」「離陸できたら蒙古へ行って馬賊になって生きて戦おう」「みんな沖繩へ行ったからもう沖繩はいい。サイパンへ行こう」と二つに分かれ、決を取ったらサイパンが勝ちました。

☆ 八月十七日、爆弾を搭載し朝から待機しました。

そしたら江川少佐が、何とか命を助けようというご配慮か、偽の命令で「いまから爆弾を一端降ろして、お前らまだ飛行機の練習も少ないし危ないから、爆弾を積み直してサイパン残存部隊と一緒に特攻する。出発」ということで、爆弾を降ろした飛行機から一機一機、石川県の小松へ参りました。私も真夜中に搭乗しました。が一週間小松で監禁され、その上で「帰れ」とのことで、着のみ着のまま

帰って来た。

☆ 私の友だちも特攻隊に志願して死んでゆきました。このような歌をご存知でしょう。

「今度会う日は靖国神社

桜の梢の下で会おう」

と、国のために命を捧げたのです。自分から志願したのです。私も志願した時には震えましたですよ。

「一歩前へ出ろ」といわれて一歩前へ出ましたが、一端すぐには出られなかった。ぐうっところらえて一歩でました。皆そうです。約一二〇名、予科練を卒業した日です。昭和二十年の一月二十一日、分隊長から「一歩前へ出ろ」といわれました。そして皆一緒でした。全員出ました。それは命を捨てるということ、自殺することなのです。誰のためか、国のためなのです。天皇陛下のためといいますが、あれは象徴で、天皇陛下に代表するもの、実際には日本なのです。自分の親であり、兄弟であり、日本のために自分は命を捨てると。

一人が戦艦にぶち当たれば千人、二千人を殺せるの

だと、日本を助けることなのだ、ただそれだけを純心な気持だけでひたすら志願しました。私は十六歳。あそこに写真が展示されています。予科練の二人です。

地藏峠 総憲 草薙隊として沖縄へ特攻戦死

野村 龍三 琴平水心隊として沖縄へ特攻戦死

昔は純心な気持で国を愛し国のために自殺する。自殺を志願した。

☆ テニアンでもサイパンでも一般の人が大勢バンザイ岬から飛び込みました。テニアンの方では、私体がバテて行けませんでした。五〇体の遺体があるそうです。

☆ 展示品の水の入った瓶は、テニアン島の一番北側で、最後の突撃をした司令部の近くの断崖の途中にあったものです。あの水を飲みかけで、最後まで飲めずに亡くなられたのでしょう。哀れですね。兵隊です。遺骨もあの認識票（展示品）もあそこにありました。

このようなお気持で、前回の平成十年九月の遺骨収集の時、後三〇メートルのところに遺骨があるのに疲れて行けなかった。その遺骨に対し、泉老師は恐らく「今度来るから」と心に約束をして帰られたのでしう。十一年二月七日の行動もそのためであったのは、と私は老師の心情を思い、心を痛めております。

七 マリアナ諸島の遺骨収集の状況

1 泉信潤師のサイパン・テニアン遺骨の収集状況

平成 三年 十月 サイパン島
 平成 五年 四月 サイパン島・テニアン島
 平成 六年 四月 サイパン島
 平成 七年 一月 サイパン島・テニアン島
 平成 七年十一月 サイパン島
 平成 八年 五月 サイパン島
 平成 八年 六月 テニアン島
 平成 九年 六月 サイパン島・テニアン島
 平成 九年十二月 テニアン島

台 風

平成 十年 五月 テニアン島
 平成 十年 九月 テニアン島
 平成十一年 二月 テニアン島

2 厚生省の行った遺骨収集（ミクロネシア）

1 第一次計画による遺骨収集の実施

① 昭和二十八年二月十八日より二十日間

サイパン島において遺骨収集

同年二月二十一日より二日間

テニアン島において遺骨収集

2 第二次計画による遺骨収集の実施

① サイパン島

昭和四十三年三月二十三日より同年四月十七日

昭和四十六年三月二日 より同年三月十一日

昭和四十六年十月三十日 より同年十二月一日

② テニアン島

昭和四十三年三月より同年四月まで

昭和四十六年

3 第二次計画による遺骨収集の実施

- ① 昭和四十八年度 サイパン島・テニアン島
- ② 昭和四十九年度 サイパン島・テニアン島・

グアム島・ロタ島

- ③ 昭和五十年年度

第一次 サイパン島・テニアン島

第二次 サイパン島・テニアン島・グアム

島

4 第三次計画終了後の遺骨収集

- ① 昭和五十一年度 第一次マリアナ諸島

同年度 第二次マリアナ諸島

- ② 昭和五十二年年度 マリアナ諸島

- ③ 昭和五十三年年度 第一次マリアナ諸島

第二次マリアナ諸島

- ④ 昭和五十四年度 第一次マリアナ諸島

第二次マリアナ諸島

- ⑤ 昭和五十五年年度 マリアナ諸島

- ⑥ 昭和五十六年度 マリアナ諸島

- ⑦ 昭和五十七年度 マリアナ諸島

- ⑧ 昭和五十八年度 マリアナ諸島

- ⑨ 昭和五十九年度 マリアナ諸島

- ⑩ 昭和六十年年度 マリアナ諸島

- ⑪ 昭和六十一年度 マリアナ諸島

- ⑫ 昭和六十二年年度 マリアナ諸島

- ⑬ 昭和六十三年年度 マリアナ諸島

- ⑭ 平成三年年度 テニアン島

- ⑮ 平成五年年度 マリアナ諸島

- ⑯ 平成七年度 マリアナ諸島

*マリアナ諸島には(サイパン・グアム・テニアン

島・ベリリュー島・パラオ島等を含んでい

る)

3 戦没者遺骨収集等地域別実施概況(次頁)

(平成七年三月三十一日現在)

【解説】

テニアン島の歴史と地誌

第一次大戦において、日本軍はドイツ領の南洋諸島を占領し、テニアンには南洋興発株が精糖工場を建

戦没者遺骨収集等地域別実施概況
(平成8年3月31日現在)

地 域 別	戦 没 者 概 数	遺 骨 送 還 概 数	政府派遣団 送 還 数
	人	柱	柱
硫 黄 島	20,100	7,999	7,780
沖 縄	186,500	184,830	49,340
中 部 太 平 洋	247,000	71,970	57,330
フ ィ リ ピ ン	518,000	131,530	83,550
ベトナム・カンボジア・ラオス	12,400	6,900	0
タイ・マレーシア・シンガポール	21,000	20,150	2,120
ミ ャ ン マ ー	137,000	91,340	30,980
イ ン ド	30,000	19,940	2,610
北 ボ ル ネ オ	12,000	6,910	1,590
インドネシア・西イリアン除く	31,400	11,020	830
西 イ リ ア ン	53,000	31,850	8,270
東 部 ニ ュ ー ギ ニ ア ・ ビスマーク・ソロモン諸島	246,300	104,100	42,410
韓 国	18,900	12,400	430
北 朝 鮮	34,600	13,000	0
中 国 東 北 部	245,400	39,050	1,040
中 国 本 土	465,700	438,470	370
台 湾	41,900	26,310	240
樺太・千島・アリューシャン	24,400	1,590	430
ソ 連 本 土	52,700	5,170	3,770
モ ン ゴ ル	1,700	400	400
そ の 他	…	180	180
合 計	2,400,000	1,225,100	293,370

て、東洋第二の工場とし、生産量は日本全生産量の十二％に達したが、日米関係の悪化により、砂糖の生産高も昭和十一年を境として下降線を辿った。

テニアン島は、幅約五キロのサイパン水道を隔ててサイパン島に相對し、サイパンと共にマリアナ防衛上の要となった。

地形は隆起珊瑚からなる比較的平坦な島で、南北約二〇キロ、東西約一〇キロ、面積は約九八平方キロ（八丈島の一・四倍、サイパン島の二分の一）、周囲は約五〇キロである。地形が平であるので、至る所飛行場適地となり、その意味でも、マリアナ最大の軍事的価値のある島である。北部は、標高約六〇メートル未満の広い台地でハゴイと呼び、第一、第四飛行場のほか、ハゴイ池等がある。新湊高地の南側には第二飛行場がある。

カロリナス高地は、テニアン島南部を北東から南西に走る台地で高さ約一七〇メートル、南側の崖には自然の海洞、鍾乳洞が多い。本島の道路はマリアナ諸島

唯一の道路網を構成し、全島にわたり四通八達し、軍隊の輸送、機動に便利であった。本島の給水は主として天水（雨水）に依存するほか、一部地下水を雑用に使い、水量は多く無かった。本島唯一の地下水はマルボ井戸から得られるだけであった。

本島は、砂糖黍栽培、精糖業の島で、沖縄出身者が多く、昭和十九年二月下旬、米機動部隊の空襲以後、婦女子の内地引き揚げを実施したため、米軍上陸直前の一般居留民は約一万五、七〇〇人で、その中には朝鮮人二、七〇〇人と四人の中国人も含んでいた。日本人は概ね一三、〇〇〇人であった。このほかチャモロ族が二六人いた。

二 テニアン島の兵力

テニアンの陸軍及び海軍部隊の編成は次表のごとくであり、陸軍四、〇〇一人、海軍四、一一〇人、計約八、一一一人であった。

1 陸軍—テニアン島関係部隊人員一覽表—

〔部 隊 名 部 隊 長 名 人 員 〕
 歩兵第五十連隊

本 部 大佐 緒方 敬志 六〇

第一大隊 大尉 松田 和男 五七五

第二大隊 大尉 神山 新七 五七二

第三大隊 大尉 山本 好江 五七五

砲兵大隊 大尉 平松 龍彦 三六〇

〔昭和一九・六・二六甲斐克之少佐と交代。〕

甲斐少佐は七・三連隊本部付)

工兵中隊 中尉 天野 忠一 一六九

通信中隊 中尉 林 亨 一四一

補給中隊 中尉 野崎 健司 二〇〇

衛生 隊 中尉 鳴澤 正明 一三〇

速射砲小隊 少尉 大谷 元 四二

小 計 二、八二四

(ロタ島への先発者一〇三人を除いた数字かど

うかは不明)

歩兵第一三五連隊第一大隊

大尉 和泉 文三 九五〇

歩兵第十八連隊戰車中隊

中尉 鹿村 一男 六四

第三十一軍築城班 大尉 比留間正司 六〇

獨立自動車第二六四中隊第三小隊 六三

第二十九師団野戰病院

軍医中佐 福田 壽郎 四〇

配屬部隊小計 一、一七七

陸 軍 合 計 四、〇〇一

2 海 軍 — 海軍関係部隊人員一覽表 —

〔部 隊 名 部 隊 長 名 人 員 〕

第五十六警備隊 大佐 大家 吾一 九五〇

第八十二防空隊 中尉 田中吉太郎 二〇〇

第八十三防空隊 中尉 田中 明喜 二五〇

第二三三設営隊 少佐 林 邦夫 六〇〇

第一航空艦隊 中將 角田 覚治 二〇〇

第一二一航空隊 中佐 岩尾 正次

第三二一航空隊 中佐 久保徳太郎

第三四三航空隊 中佐 竹中 正雄

第五二三航空隊 中佐 和田鐵二郎 四六〇

第七六一航空隊 中佐 松本 眞實

第一〇二一航空隊 大佐 栗野原仁志

第十九魚雷網調整班

航空部隊通過者 二〇〇

第二十三航空戰隊關係 四五〇

その他建設要員（設営隊） 八〇〇

海軍合計 四、一一〇

陸海軍総計 八、一一一

3 航空部隊

六月中旬にはテニアン島の航空部隊は、おおむね次のとおりとなった。

第一二一空（薙） 司令 岩尾正次 中佐以下

偵察機三、艦爆 二

第三二一空（鵝）の一部と基地員 夜戦 二一

第三四三空（隼）の一部と基地員 零戦 八

第五二三空（鷹）の一部と基地員 艦爆 一〇

第七六一空（龍）の一部と基地員 一式陸攻 六

第一〇二一空（鳩）司令 栗野原仁志 大佐以下

遠爆（深山）一、陸攻撃二、ダグラス六

以上のはか第十一航空艦隊、第十四航空艦隊の

所屬輸送機約一二機

三 在留邦人の内地引き揚げと軍への協力

昭和十八年末ごろから婦女子と十四歳以下六十歳以上の防衛生産に直接不必要な者の内地引き揚げ方針が立てられたが、具体策は確定せず、引き揚げ時期も未定のままだった。しかし二月下旬の初空襲後、ようやく引き揚げが軌道に乗り始めた矢先、三月上旬引き揚げ者に乗せた「あめりか丸」の遭難、六月上旬「千代丸」「白山丸」の沈没等もあって、在留邦人の中には帰国を諦め、最後まで同島に踏みとどまって戦力の増強に挺身すると言う人も多かった。内地に引き揚げた人員は約二、三〇〇人で、七月下旬米軍進攻時には、約一五、七〇〇人（内朝鮮人二、七〇〇人）の邦人が

在島していた。

テナアンでは記述のように二月中旬ごろから第二三
三海軍設営隊を中心として、第二、第三飛行場の造成
が開始され、多数の在留邦人が労力奉仕を行った。ま
た在留邦人の協力を受けて、ハゴイ第一基地南側に戦
闘機用の滑走路建設工事も始められた。

四 末期のテナアン島

七月十八日には、サイパン玉砕の大本営発表が行わ
れ、放送を聞いたテナアン将兵は、一般邦人と共に、
言い知れぬ不安に沈んだ。

テナアン守備隊は、いよいよ米軍の上陸が切迫して
いることを感じ、陸海軍合同作戦会議を実施し、陸上
指揮は陸軍守備隊長・緒方大佐が執ることを確認、海
軍部隊も指揮下には入ることを角田司令長官から命ぜ
られた。

在島の海軍航空部隊は、既に全飛行機を失っていた
ので、航空部隊搭乗員、基地員、設営隊その他の人員
で陸戦隊を編成し、第五十九警備隊と共に、陸軍部隊

を骨幹として全島一丸となり、テナアンの確保に邁進
することとなった。海軍部隊の配備は、おおむね次の
とおりであった。

第五十六警備隊

テナアン港正面

第一二一、第三四三航空隊

第一基地の西側海岸

第一航空艦隊司令部、第一〇二一航空隊

ラソー山西斜面

第十一、第十四航空艦隊の部隊

ラソー山西斜面

第七六一、第五二三航空隊

第二飛行場

第三二一航空隊、設営隊（設営隊）

第三飛行場

テナアンの在留邦人も召集され、分会長中尾俊介少
尉の下に統率された。南洋庁のテナアン出張所（所長
加藤勝吉事務官は会議のためサイパンに出張中、同島
で玉砕した）は、警備課長を中心として警防団を組織
し、南洋興発会社では、精糖所長統轄の下に、工場、
各農場ごとに警防団を組織して、軍に協力する態勢を
とった。

米軍の砲爆撃は、七月二十日以来、一層激しくな
り、二十三日は戦艦四隻、他の海岸一体砲撃、空母か

らの艦載機は三回にわたり、テニアン港、第三飛行場、カロリナス高地、水際陣地に対し猛烈な銃爆撃を加えた。

五 連合艦隊参謀長宛ての電報と

一 般在留邦人の活躍

第一航空艦隊参謀長三和義男大佐は、守備隊の運命もすでに時間の問題であると覚悟し、七月二十八日、連合艦隊参謀長に宛てて次の電報を発電した。

『連合艦隊機密電第二七〇九五八番発電了承 極力 貴意ニ副ウ如ク実施スベキモ戦勢急変シ且敵砲爆撃 猛烈ニシテ食料飲料水ノ搬送貯蔵意ノ如クナラズ 且当地ハ御承知ノ如ク「マルポ」水源ヲ除イテハ天 水以外ニ水源ナシ今雨期ハ今ノ処雨量極メテ少「マルポ」ヲ失ウ事が大勢ヲ決スルモノト認ムルヲ至当トス 而シテ此旬日ヲ井出ザルベシト認メラレアリ』

テニアン島一般邦人青壮年の活躍は涙ぐましいものがあり、在郷軍人は勿論のこと、警防団あるいは青年

団として、米軍上陸以来よく軍に協力、戦闘に従事した。七月二十八日テニアン陸海軍最高指揮官は、陸海軍両大臣ならびに大東亜大臣あて次の電報を発して、その勇戦敢闘を報告した。

一 支庁及民間幹部指導ノ下ニ在「テニアン」島邦

人一五、〇〇〇名中十六歳ヨリ四十五歳ノモノ全 員三、五〇〇名義勇隊ニ編成シ、軍ニ全幅協力中 残余ハ老幼婦女子ニテソノ大部ハ既ニ「カロリ ナス」地区ヨリ避難シアリ

二 義勇隊ハ六ヶ中隊ニ編成シ軍各隊ニ配属 奮戦

敢闘シツツアリテ皇国人トシテノ伝統ヲ遺憾ナク 發揮シツツアリ

三 支所長代理在留邦人幹部ヲ合せ 老幼婦女子ハ

集結ノ上爆薬ニヨリ処決ス ナオ支所長ハ敵「サイパン」上陸前ニ「サイパン」ニ出張未帰還

この電報はサイパン、テニアンの戦闘期間中、軍が公式に一般邦人に関して報じた唯一のものであった。

既述のようにテニアン出張所長は会議のためサイパンに出張中玉碎し、刑務課長寺島円喜警部が出張所長代

理として、所員とテニアン警防団西野宇三郎団長らを指揮し、在住民の指導に当たっていたのである。

六 テニアン島 日本軍玉砕す

マルボ井戸の水源も遂に米軍の手中に落ち、米軍はわが最後の抵抗陣地に突入する態勢となった。

緒方連隊長は、以上の戦況から既にテニアン戦局の大勢も決したと判断し、同日夜大本営およびグアムの小幡軍司令官に宛て、最後の報告を次のように電報した。

『守備隊ハ陸海軍協同一致敢闘センモ將兵相次イデ倒レ 最後ノ処置ヲ終了シ 最高指揮官ヲ先頭ニ近ク最後ノ突撃ヲ敢行セントス 部下將兵ノ勇戦ニモ拘ワラズ小官ノ指揮拙劣ナリシタメ「テニヤン」守備ノ任務ヲ果タシ得ズ 光輝アル軍旗ト歴史アル陸下ノ連隊ト共ニ玉砕セントス』

中島文彦氏は「テニアン基地の玉砕」と題し、三十一日ごろの戦闘の状況について「知性 別冊」に次の

ように寄稿している。

……七月三十日夜から三十一日夕刻に至る戦闘は、マルボ盆地から山腹ジャングル地帯にかけて行われ、激しい攻防戦が各所に展開し凄絶を極めた。この附近は長く南洋開発関係者が待機し、サイパン営業所庶務の若松武司担任が専修学校在校生及び卒業生を集結指揮した処であるが、その敢闘ぶりは將兵驚嘆の的だった。糧食弾薬の運搬は勿論、伝令・誘導を率先申し出で、その勇敢さは百戦錬磨の勇士でさえ瞠目していた。若松担任は若松晴司陸軍少将の令息であるが、時すでに玉砕の決定的なことを悟り従容自決した。

テニアン島最後の突撃も、戦果を収めることなく終息し、守備隊の組織的戦闘は、八月三日夜明けと共に終わった。

カロリナス東側のジャングル地帯には、民間人と指揮官のいない兵が、そこ、ここの洞窟や岩陰に集まっていたが既に先頭力はなかった。

どこからともなく「食料を確保して長期戦に移れ」とか「天命を保有せよ」等、出所不明の命令が伝わ

り、部隊は離散して行った。

このテニアン島の戦いは九日間で終わった。この間算定された日本軍の戦死は五、〇〇〇人以上で、残り約四、〇〇〇人が、爾後の遊撃戦に、あるいは戦意を失って洞窟をさ迷うこととなった。一方米軍は三八九人の戦死と一、八一六人の負傷者を出した。

掃討戦と終戦

八月三日ごろから米軍は艦上の拡声器で降伏を勧め、民間人の自決を戒め、一方陸上からは投降勧告と並行して、洞窟から洞窟への掃討を続けた。

このころまでの民間人の戦没者は、既に三、〇〇〇を越え、崖から身を投ずるもの、手榴弾で自決するものも多かった。

生存者は、数人から数十人の集団となって、米軍の施設や飛行機、自動車を破壊したり、人員を襲撃するなど遊撃戦を続けながら、友軍のテニアン奪回の日を期待したのであるが、米軍の掃討戦の激化と食糧の欠乏によって、次第に損耗して行った。

昭和十九年十月中旬ごろには、約一二、二〇〇人の

民間人（内三、七〇〇人は朝鮮人）がチュロの元南洋開発直営農場に收容され、軍人の投降者も逐次増加し、アシーガの旧海軍送信所跡に收容された。一部はアギグアン島に脱出を企てたものもあったが、成功したものは少なかった。

七 サイパン島陸軍地上兵力と戦没者

部 隊 名	玉碎・戦没者数	復員数
第三十一軍司令部	一、二七六	四三
第三十一軍通信隊	一〇七	一
独立混成第四十七旅団	一、八八一	七三
歩兵第四十連隊第一大隊	五五六	五九
独立山砲第三連隊	九二一	四六
高射砲第二十五連隊	一、〇二二	四〇
戦車第九連隊主力	五一五	二〇
野戦機関砲第四十四中隊	一〇〇	五
独立工兵第七連隊	七二二	四〇
独立自動車第二六四中隊	一七一	九
独立自動車第二七八中隊	一七六	四

第四十三師団司令部	二四九	四	第二十九師団海上輸送	三二七	三三
歩兵第一一六連隊	三、一九一	八二	独立戦車第三中隊	九三	一
歩兵第一三五連隊	二、九三〇	一七三	独立戦車第四中隊	八二	三
歩兵第一三六連隊	三、九一九	一二九	他隊より分遣者	一九二	四
第四十三師団通信隊	二一一	一四	第十四野戦航空修理廠	一〇一	一一
第四十三師団輜重隊	九二	二	第二三野戦飛行場設定隊	六五四	二五
第四十三師団兵器勤務隊	九九	四	第一一五飛行場大隊	二三五	一〇
第四十三師団野戦病院	五九六	四	船舶工兵一六聯隊	九五四	八一
第四十三師団經理勤務隊	二、五二七	八〇	船舶通信第二大隊	三一	一二五
(通過部隊)			第五九碓迫場司令部	二〇	二九
第九派遣隊(二四歩兵団司令部)	一八五	九	第六〇碓迫場司令部	一一一	一〇
独立守備歩兵一四大隊			他に第九独立整備隊	一〇〇	?
(独歩第三百十八大隊)	五七〇	二二			
独立守備歩兵二八大隊	五八八	三一	玉碎・戦没者	約二八、五一八	
独立守備歩兵第十二大隊残置者	九六	七	内海没人員	二、二七四	
歩兵第一五聯隊一部	五八三	一三	復員者	約一、三五四	
歩兵第一五〇聯隊牛山隊	七七〇	三五	他に海軍	約一五、〇〇〇	
独立臼砲第十四大隊	六二五	二〇	なお、在留邦人約二〇、〇〇〇人中		
独立臼砲第十七大隊	五九六	三八	戦没	八、〇〇〇、一〇、〇〇〇人	

と推定される

◎資料主として、防衛庁防衛研究所著
戦史叢書より

※米軍損害の概数

戦死・行方不明	三、四四一人
負傷	一一、四六五人